

千葉県不登校児童生徒支援連絡協議会 令和6年度第1回会議 会議概要

日 時 令和6年11月1日（金）午後2時から午後4時
場 所 千葉県庁南庁舎 4階会議室

1 開会

2 あいさつ

3 構成員の紹介

4 事務局からの説明

（1）本県の不登校児童生徒の状況について

- ・令和5年度「児童生徒の問題行動等・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果（資料1）」
- ・令和5年度不登校児童生徒等実態調査結果（資料2）」

（質疑）

【千葉県子どもと親のサポートセンター 相談補助員 木下 真理】

資料1の5ページ「相談・指導等を受けていない人数」では、学校外の区分と学校内の区分の両方で重なっている人数があるということで間違いはないか。それぞれの区分の合計値と学校外と学校内を合わせた「相談・指導等を受けていない人数」の6,420人との間に差がある理由は何か。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

学校内と学校外の両方の支援を受けている方がいる。学校外の区分と学校内の区分の「相談・指導等を受けていない人数」の合計値から、両方の支援を受けている人数を除くと、支援を受けていない方の実人数の6,420人になる。

【光英 VERITAS 中学校・高等学校 教頭 秋山 等】

資料2の3ページで、「学校に「行きたくない」と思ったきっかけ」で最も多かったのが、「先生のことで気になることがあった（先生が好きじゃなかった、怖かった）」である。私達の学校でも、このようなことを理由にするケースはあるが、「何で学校に行けないの・行きたくないの」と言われた時に、都合良く、先生のせいにすることもある。何かトラブルがあったということではなく、例えば、「今までずっと担任の先生は女性だったのに男性だから」、「先生の普段の声が大きいから」などと理由にされていることがあり、必ずしも教員との関係が悪いことだけの数字ではないのではないかという所感である。

また、「先生のことで気になることがあった。（暴力やひどい言葉があった。）」という回

答についても、教員が穏やかな口調で注意したところ、注意された生徒はそれがきっかけで学校に行きたくないと言っているケースがあった。こちらも、本当の理由とは別に、先生のことを理由にしている子もいるのではないかという所感だ。

【千葉県フリースクール等ネットワーク 代表 前北 海】

資料1の3ページの「6 不登校児童生徒への指導結果状況」の「指導の結果、登校する又はできるようになった児童生徒」とは具体的にどのような状態か。私の活動の感覚からすると、この数の子どもたちが、学校に戻っているとは思えないので、言葉のマジックがあり、必ずしも週5回学校に行っているのではないと思う。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

確認して、回答する。

【千葉県フリースクール等ネットワーク 代表 前北 海】

この調査結果から、25%程の不登校の子ども達が指導により完全に登校するようになると考えてしまうのは、状況を見誤っていると思う。

そして、資料2の3ページの、「先生が好きじゃなかった・怖かった」について、私が副代表を務める多様な学びプロジェクトでも調査をしており、去年、子どもたちの回答を定量化している。そこでも1,700件程の回答があり、「教師の子供への無理解や不適切な対応など」8.2%、「教師の価値観の押し付け・理不尽な要求」5.6%、「理解しない」6.0%、「子供と合わない・相性が悪い」1.2%である。子どもの声を聞くと、先生の問題であると出てきているのは事実である。不登校の問題でこれから考えないといけないのは、「医療モデル」であり子どもが悪いというスタンスからではなく、「社会モデル」様々な子どもたちがいる中でどういうふうに学校の中へ受け入れていくかを考えていかなければならない。そうしないと、学校でつらい思いをする子どもたちが生まれ続けると考えている。

【東京学芸大学教育学部 教授 加瀬 進】

資料2の5ページ「④学校を休んでいるときにあった・行ったこと」について、例えば、「学校ではない県や市のやっている相談室へ行った」を「なかった」と67.4%が回答しているが、「なかった」ことの原因はわかるか。定量的な調査では難しいか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

個別の理由まではわからない。

【東京学芸大学教育学部 教授 加瀬 進】

資料2の9ページ「⑮変化の具体的内容」について、変化というのは、どのくらいのスパンか。例えば、1年間なのか、1か月なのか。それとも、変化があったというだけの意

味でよいか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

特に期間を示さず、変化があったかを質問している。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

資料2の5ページ「④学校を休んでいるときにあった・行ったこと」について、我々も意外だったのは、「病院へ行った」が、55.0%で結構多いようだ。

【匝瑳市立八日市場小学校 校長 裕倉 孝夫】

先ほど、質問があった部分だが、資料2の3ページ「②学校に「行きたくない」と思ったきっかけ（学校のこと）」で、資料は小学校と中学校が一緒になっているが、別々に数字を出せるか。小学校は担任が1日ほぼ子どもたちと付き合っているが、中学校は教科担任であり、状況が違っている。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

「先生のことで気になることがあった（先生が好きではなかった、怖かった）の小学校と中学校の違いについて、小学生が29.8%、中学生が26.8%である。

また、先ほど、前北氏から質問のあった、「指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒」の定義について、この調査では、「1学期中は全く登校できなかったが、教育支援センターでの支援を受ける中で、特定の教科に興味を持てるようになり、3学期には興味がある教科の授業がある日は登校できるようになった。」「中学3年生で2学期の前半までは月1回しか登校できなかったが、担任が家庭訪問を繰り返す中で、将来の進路などを自ら考え、週に1度程度は登校するようになった。」などの例示がある。

【千葉県フリースクール等ネットワーク 代表 前北 海】

実はその定義を知っていたが、この調査の「指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒」が意味する内容をこのデータをご覧になれる皆さんが理解しているかどうかは疑問である。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

保護者に対しても調査しているが、学校を休むようになったきっかけとして、「先生との関係」を回答している小学生の保護者は非常に多い。

【東京学芸大学教育学部 教授 加瀬 進】

仮説の話をするが、資料2の6ページ「⑦子供との関わりについて」で、「子供との普段の接触を増やした」、「子供の気持ちを理解するよう努力した」が高い一方、「子供の気持ちが理解できないと感じた」も結構高い。両方合わせると、親御さんの葛藤というか、

理解しようとしているのだが、なかなか理解できないのではないかと。今、いろいろな施策の方向の中で、「再登校を必ずしも増やさない。」と言っているが、全員がこれを理解し、納得出来ているのかというと、必ずしもそうではないと思っている。親御さんがそういう葛藤に苦しんでいて、その葛藤が表れて、子どもは付度するようなこともあるのかもしれないと感じている。

また、資料2の9ページ「⑬「知っていたが利用しなかった」理由：民間施設（フリースクール等）へ通所」について、「子供が嫌がったから」が58%である。これも本当に子どもが嫌がったのかどうなのかが定量的な調査からは見えないと思っている。定量的な調査は大枠を掴むのに良いが、少し事例を積み重ねていく必要があるのではないかとと思う。どういう理由があるかを横並びにするのではなく、段々と登校しなくなっていく、そのフェーズが変わるときにどんなエピソードがあるのか、学校ではどういう対応をしたのか、家庭ではどういう対応をしたのかなどを追いかけていけるようなことができないだろうか。忙しい学校の先生方に対応してもらうのは現実的じゃないと思っているが、後程説明のあるスクールソーシャルワーカーの方との連携に係ってくるのではないかと。そこに至る経緯の中で、なぜそのようになったのかが整理されると、子どもが苦しまないような応援体制ができると思う。

（２）本県の不登校児童生徒支援の取組について

- ・令和6年度新規事業及び継続事業（資料3）
- ・エデュオプちばの動画

（質疑）

【千葉県PTA連絡協議会 会長 木村 得道】

オンライン授業は、中学1年～3年まで一緒に行っているのか。それとも別々に実施しているのか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

別々である。そのため、授業配信のボックスを3つ設置している。

【千葉県PTA連絡協議会 会長 木村 得道】

受講している生徒の評判は良いか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

アンケートを実施しており、結果は好評を得ている。

【千葉県PTA連絡協議会 会長 木村 得道】

私が子どもだった頃には、オンライン授業なんてなかったが、オンライン授業を行う側としても何かと苦労があるのではないかと。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

講師の先生もベテランだが、段々とオンライン授業に慣れて、生徒と関係を築いていつている。

【光英 VERITAS 中学校・高等学校 教頭 秋山 等】

授業の準備にかなり時間を掛けているのではないか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

おっしゃるとおりである。一人の教員が、中1～中3のそれぞれ週あたり3時間受けもっており、毎時間教材研究しなければいけない。普通、教員は数クラスを受け持つので、1つ授業研究すると、何クラスかに授業を行う。配信が追い付かない。

【千葉市教育委員会学校教育部教育支援課 課長 保田 裕介】

オンラインの双方向授業は難しいと思っていたが、ホワイトボードを使うなどアナログの要素も入っているのですごく工夫されていると感じた。

【千葉県子どもと親のサポートセンター 相談補助員 木下 真理】

オンラインでお話されている先生は、対面と違って、子どもたちの反応が分からない中で話をしている。かなり努力されていると思う。

【千葉県フリースクール等ネットワーク 代表 前北 海】

「エデュオプちば」には493人が登録しているが、県としては、どれくらいの登録者数を狙って始めたのか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

登録者の目標は定めていない。より多くの方に利用してもらいたいと考えている。

【千葉県フリースクール等ネットワーク 代表 前北 海】

不登校児童生徒全体で考えると0.3%くらいのはずである。頑張っている先生を応援するためにも、何人へリーチをして、どのようなことをやって、どこにつなげていくかもセットで考えてあげないと。先生たちを下支えする役割を考えなければいけないと思うので、説明会なども実施できればいいと思った。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

おっしゃるとおりだが、各学年の受講者は40人くらいであり、現在の体制では限界であると思う。これ以上増えていくと、受講している子どもたちに対応するのは難しい。

【光英 VERITAS 中学校・高等学校 教頭 秋山 等】

私たちの学校の不登校の生徒も学習権を守らなければいけない。生徒は全員 i P a d を持っているので、授業を配信し、不登校の生徒には協働学習・授業支援プラットフォームのロイノートを使って取り組んでもらっている。先ほど見た授業のような作りこみを普段の授業と並行して行うのはなかなか難しい。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

市町村がやるよりは県がまとめてやった方が良いと思って「エデュオプちば」を始めたが、これも1つの施策に過ぎず、オンライン授業に登録しない子も圧倒的に多いので、いろいろな支援策を実施していかないといけないと感じている。

【東京学芸大学教育学部 教授 加瀬 進】

フリースクール等に関するモデル授業について、8月29日の文部科学省の通知、「不登校児童生徒が欠席中に行った学習の成果に係る成績評価について」を見越して実施しているものか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

モデル事業は今年度初めから準備して進めているものである。

【東京学芸大学教育学部 教授 加瀬 進】

資料2の7ページのスクールカウンセラーの配置について、調査では、「行われなかった／行われなくてよかった」という回答が21.5%ある。スクールカウンセラーの配置の充実強化とは、専門性の高いカウンセラー、資格を持っている人を増やすということか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

本県では409名のスクールカウンセラーが働いているが、基礎的な研修の実施、スクールカウンセラーを指導するスーパーバイザーというより資質の高い者による新任のスクールカウンセラーへの指導、具体的なケース会議を踏まえた研修を実施することで、資質の向上を図っている。

【東京学芸大学教育学部 教授 加瀬 進】

スクールソーシャルワーカーの時間単価いくらか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 不登校児童生徒支援室長 中村 光余】

3,500円である。

【東京学芸大学教育学部 教授 加瀬 進】

時間単価が2,000円くらいの自治体もあり、待遇改善も必要であろう。

また、資料3の7ページ「県立高等学校での受入体制の整備」について、意見になるが、昨年度、学びの多様化学校の中学校の調査に行ったが、不登校の子どもは広域通信制に通う子が多く、中学校の内申点は関係なく、評価・評定の問題があまり出てこない。高校進学、進路保障の点も重要だと思っている。

【千葉県フリースクール等ネットワーク 代表 前北 海】

資料2の実態調査について、全数調査はすごく珍しい。深掘りの調査をかなりできるはずだ。予算を獲得して深掘り調査の実施を考えているか。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

会議資料は抜粋で詳細なデータはホームページに公開している。もう少し分析する必要はあると思う。

【千葉県フリースクール等ネットワーク 代表 前北 海】

先ほど出たフリースクールに行きたくないという像の中でも、いろいろなクロス集計をかけると見えてくるものがあると思う。調査しただけではなく、人が見えるようなぐらいいまで分析した方が良いと思う。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

もう少し詳しく分析していきたい。

5 意見交換

事務局及び健康福祉部健康福祉指導課より資料等により説明。

【市川市教育委員会学校教育部指導課 関原課長】

スクールソーシャルワーカーの取組について、本市では、信篤小学校に拠点を持っており、近隣の学校を支援している。校長の話では、自校の教職員から様々な課題を持つ児童の話があがっており、スクールソーシャルワーカーが相談に応じるなど学校体制として助かっていると聞いている。また、私が葛南地区の不登校児童生徒支援のサポートセンター的な役割の学校に赴任していた時に、訪問相談担当教員とスクールソーシャルワーカーとが、多様な事案について連携して対応するなど、改めてスクールソーシャルワーカーの存在意義を痛感した。スクールソーシャルワーカーのコンサルについて、教育委員会としても各学校の校長先生方に話しているが、活用の仕方や周知などに課題があると考えている。

【千葉県子どもと親のサポートセンター 相談補助員 木下 真理】

福祉の視点が教育現場に入るのは凄く大事なことだと思っている。エデュオペちは、フリースクールの取組、教育支援センターの取組、それぞれ素晴らしいことだと思うが、普段保護者の皆様から相談を受けていて実感するのは、そのような所に繋がったり、活用で

きるお子さんは非常に限られている、ということである。「家から子どもが出られない。」、「友達が来ても会えない。」。もっと大変な状況だと、「部屋から出られない。」ということもある。特に初期の段階で無理に学校に行かせようとするとう親子関係が難しくなってしまう場合もある。そして、保護者の方が疲れ切ってしまうと、支援に関する情報を集めるパワーが低下してしまうこともある。そこに寄り添っていけるスクールソーシャルワーカーの存在は大切に、カウンセラーと違って学校から出て行き、アウトリーチできるのが非常に大きな強みだと思う。資料1で支援に繋がらない児童生徒がとても多いとあったが、支援に繋げていくことは非常に大事な観点なので、スクールソーシャルワーカーの配置の充実と技術の向上は非常に重要だと思う。

【東京学芸大学教育学部 教授 加瀬 進】

相談支援体制に関わって、連携の難しさは様々なことがあげられるが、価値観の共有の問題もある。学校の先生と、ソーシャルワーカーと、カウンセラーと全部価値観が違い、専門性も違う。そこに保護者・本人の価値観もあるので、自分の価値観を自覚し、ズレがあることを認識して、皆で共有して、調整をしていくっていった時に、どういうふうに応援したかの個別事例を共有することが大切だと思っている。その時に、「苦勞してここまでやった。」だけではなく、「必要な資源があったら良いんだけど、ない。」、「必要な資源はあるけど、定員がいっぱいで使えない。」、「資源が結構あってなおかつ頑張ってくれている。」。そのような資源のアセスメントというか、中長期的見通しの中で、資源をどう作るか、あるんだけど使えないところを、どうしたら使えるようになるかをミクロなレベルではなくて、大きいレベルで考えていただければと思う。

【千葉県フリースクール等ネットワーク 代表 前北 海】

まず「教育と福祉の連携について」というワードがなぜ出てくるのかというと、連携がないから出てくる訳であり、連携を進めていくことは重要なことである。また、私は福祉にも関わっていると思うことは、福祉部門が不登校を扱うことはできない。縦割りの関係で。福祉の方は、貧困から入った不登校像である。そこは少し協議をしてほしいと思う。もう一つは、情報共有の難しさ。これはルールを作ってもらいたいと思う。学校には、個人情報保護のため情報共有を断られることがかなり多い。先ほど、加瀬先生が言っていたように、文化が違うので、例えば、スクールソーシャルワーカーが、地域コーディネーター的な役割をするときに、教育行政、福祉、フリースクールや地域の資源の知識は別なので、これを統合させる意味でのソーシャルワーカーの資質向上は大賛成である。繋いでいくことを意識しないといけないと思う。こども家庭庁は不登校の子どもを支援する地域コーディネーターの事業を概算要求中であるが、縦割りの部分の調整を考えないと、自治体から手が挙がっても進まないと思う。教育だけでやるのは、難しいので、福祉との連携ありきで考えていく必要があるのではないかなと思う。是非、スクールソーシャルワーカーと地域を繋ぐ地域コーディネーターが、どのように連携していくのかを一緒に考えられたらいいと思う。

個人情報 の やり取り の 中では、ヤングケアラー の 法律 など も 改正 されて、学校 中の アンケート 調査 など は、福祉 の ほう に 情報 は 上が っ て こ ない。どこ まで 出 せる の か を 新 し く でき た 法律 など も 含 め な が ら、考 え て い か ない と い け ない と 思 う。

【NPO法人千葉こども家庭支援センター 理事長 杉本 景子】

福祉 の こと を 大 切 だ と 思 っ て い て、例 え ば 生 活 環 境 の 問 題 を 抱 え て い る 生 徒 や、不 登 校 に な っ て い な く て も 様 々 な 問 題 を 抱 え て い る 家 庭 は、ソ ー シ ャ ル ワ ー カ ー と 繋 げ る か 繋 げ ない か で、随 分 変 わ る 印 象 を 持 っ て い る。不 登 校 に 関 し て、フ リ ー ス ク ー ル の 立 場 か ら 申 し 上 げ る と、教 育 に 関 す る 課 題 は、教 育 委 員 会 と の 連 携 の 部 分 に な る。福 祉 的 な 助 け が 必 要 で、さ ら に 不 登 校 に な っ て い る 子 ど も は、い わ ゆ る 「居 場 所」 と し て、か な り 福 祉 的 な 要 素 で 支 援 を 行 っ て い る 民 間 の 施 設 や 団 体 が あ る と 思 う の で、そ う い っ た 施 設 や 団 体 は 行 政 の 福 祉 部 門 と 繋 が っ て い く 必 要 が あ る と 思 う。団 体 に よ っ て、そ れ ぞ れ の 支 援 内 容 に 特 徴 が あ る と 思 う の で、福 祉 と の 連 携 が そ ち ら の 民 間 の 方 に も 必 要 だ と 思 っ て い る。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

ソ ー シ ャ ル ワ ー カ ー 1 人 で 5 ～ 6 校 を 担 当 し て い る。そ う す る と、見 き れ ない と ころ も で て き 得 る。ソ ー シ ャ ル ワ ー カ ー が し っ か り と 対 応 でき る 体 制 を 考 え て い き た い。

【千葉県フリースクール等ネットワーク 代表 前北 海】

単 純 計 算 す る と、1 人 当 た り の 相 談 が 5 0 0 ケ ー ス 以 上 で と て も 多 い。

そ し て、大 事 な こと は、校 長 先 生 など 使 う 側 が ど の よ う に 使 う の か と い う こと が 大 事 だ と 思 う。そ も そ も、ス ク ー ル カ ウ ン セ リ ン グ が 何 か と い う こと が 学 校 に な か な か 伝 わ っ て ない と 思 う。さ ら に、ス ク ー ル ソ ー シ ャ ル ワ ー カ ー と い う 免 許 は ない の で、社 会 福 祉 士 な ど ス ク ー ル ソ ー シ ャ ル ワ ー カ ー と し て 働 い て も ら う 方 に ス ク ー ル ソ ー シ ャ ル ワ ー カ ー に 必 要 な 知 識 を 提 供 す る の は 県 の 役 目 だ と 思 う。使 う 側 が ど う い っ た と き に 使 っ て も ら う か と い う こと と、そ の 資 質 の 向 上 っ て い う の は、両 輪 必 要 だ ろ う と 思 っ て い る。

【千葉県教育庁教育振興部児童生徒安全課 課長 伊澤 浩二】

本 日 い た だ いた 様 々 な 意 見 に 感 謝 す る。い た だ いた ご 意 見 一 つ 一 つ を 踏 ま え、新 し い 事 業 など に つ な げ る など でき た ら と 思 っ て い る。

6 閉会